

道鐵下地の一唯洋東

通開閤草淺野上

UNIVERSITY

49



東洋地下鐵道株式會社



1927

はじめに

三重県立美術館のエントランスから東に伸びる廊下を進むと、柳原義達記念館にたどり着く。大小2つの展示室から成るこの開放的な空間では、戦後日本の具象彫刻界を代表する柳原義達(1910-2004)の彫刻作品や素描、資料類を4期にわけて常設展示している¹(図1)。ときには、柳原義達の芸術世界や彫刻表現全般について、別の角度から考える契機となるような特集展示を行うこともある。

日本の近現代美術の検証を活動の中心に据えてきた当館では、1982年の閉館時に、柳原の代表作《赤毛の女》(1956年)、《黒人の女》(1956年)、《バルザックのモデルたりし男》(1957年)の3点を収蔵し、常設展示等で紹介するとともに、1996年に「柳原義達展 道標—一生のあかしを刻む」、1999年に「柳原義達デッサン展」を開催している。2002年には、作者本人から彫刻作品72点と600点以上の素描の寄贈を受け、美術館開館20周年にあたる2003年11月、柳原義達記念館が開館した²。作家没後も遺族から、彫刻原型や関連資料、柳原義達旧蔵書籍などの寄贈を受け、柳原作品は三重県立美術館のコレクションにおいて重要な位置を占めることとなった。また、記念館で常時彫刻作品を展覧していることや、作家遺族により設立された柳原操基金の助成を受けて実施している柳原義達顕彰事業は、当館の特徴ある活動のひとつとなっている。事業の詳細や成果は展覧会の開催や作品集などの印刷物、ホームページの年報等で発表、蓄積しているが、ここでは、それらの顕彰事業の概要を紹介するとともに、今後の展望についても触れておきたい。

1. 原型修復事業 — 原型の修復とその紹介 —

当館の柳原コレクションには、ブロンズ彫刻の元となる原型も含まれている。彫刻家は、まず、加工しやすい粘土を用いて塑像と呼ばれる作品を作るが、粘土は変形、汚損しやすく、制作時の状態を長く維持することが難しい。そこで、強度のある型と置き換えるため、塑像を石膏で型取って外型をつくった後、その外型に石膏を流し込み原型をつくる³。さらに、その原型を元に鋳型を製作し、熱したブロンズを型に流し込んで成形するという工程を経て、美術館などでよくみかけるブロンズ彫刻が完成する。作家がはじめに作った塑像は、外型をつくる段階で掻き出されて消失することから、原型が作品の基本となり重視されるが、それをもとに型取りをして鋳造を行うため、汚れや損傷を受けやすいという難点がある。さらに、物理的には、原型があれば、作家の意思にかかわらず繰り返しの鋳造が可能となることから、原型の保管・管理は難しいとされている。

当館が受贈を受けた原型も、表面の汚損に加え、欠損や陥没、内部鉄芯の発錆や腐食が進んでいた。戦前の柳原作品は、預け先の火災でほとんどが焼失したが、当館に寄贈された原型には、1939年の《(仔)山羊》⁴や1940年の《皇帝ペンギンのレリーフ》など、資料的にも貴重な作品が含まれている。柳原コレクションを原型も含めて、適切に保存・活用し、後世に伝えることは、当館にとって喫緊の課題となっていた。保存修復担当芸員と修復処置を担当したブロンズスタジオによる原型の詳細な調査、打合せを経て、クリーニングや腐食部分の防錆塗料塗布、欠損部分の石膏補填や着色が施された。さらに、ブロンズ作品との比較展示を視野に入れ、展示可能な状態にするための処置が行なわれるとともに、ブロンズ作品に台座のあるものについては、木製台座が製作された。2014年から2017年まで4年をかけて、早急な処置が必要と判断された47点の修復が完了した⁵。



図1

2017年4月には、ブロンズ作品と主要な原型、素描等を掲載した作品集『柳原義達—呼吸するブロンズ—』を発行。柳原の没後初となるこの作品集は、ブロンズ作品と原型を比較できるように図版を掲載していることに加え、作家自身のことばや制作中のスナップショットが重要な要素として採り入れられている。また、図版頁には、彫刻の一部を拡大した写真や、複数の視点から撮影された写真も用いられており、柳原義達その人と作品に、多角的なアプローチを試みた内容となっている。

さらに、原型の修復完成を記念して、2018年12月11日～2019年3月24日の間、「柳原義達—ブロンズ彫刻と原型展」を開催した。最初期作品《(仔)山羊》の石膏原型から、道標シリーズの石膏原型、FRPの原型を含む28点を展示。ブロンズ彫刻と原型を並べて展示することで、原型の重要性と作品としての魅力に触れ、また、制作工程も含めて、ブロンズ彫刻についてより深く知り、考える契機とすることを目指した内容となった(図2)。

2. 柳原義達展の開催

三重から遠く、来館が難しい地域にある美術館3館に柳原作品を貸出し、「柳原義達展」を共催した。

2019年の第1回目は、岩手県立美術館での開催となった。同館には、「松本竣介・舟越保武展示室」という同県出身の洋画家と彫刻家を顕彰する展示室がある。舟越保武(1912-2002)は、柳原の2歳年少で、東京美術学校の3年後輩にあたる彫刻家。柳原と同時期に東京美術学校彫刻科に学び、ともに国画会を経て、後に新制作派協会彫刻部の創設に参加している。同館での柳原義達展は、戦後の具象彫刻界に大きな足跡を残した2人の彫刻家の作品を同時に紹介する貴重な機会となった。また、この展覧会では、1977年、市民運動により提案され、4人の彫刻家が競作し、釧路市の幣舞橋に設置された「道東の四季」シリーズのうち、舟越の《道東の四季—春—》(岩手県立美術館の屋外に設置)と柳原の《道東の四季—秋—》が揃うことにもなった。《道東の四季—秋—》は、2011年の東日本大震災で同県陸前高田市において大津波にのみこまれ、両足首から下と片手を失い、修復を経て岩手県立美術館寄託となっている《岩頭の女》(陸前高田市教育委員会所蔵)と同作である。被災前の姿を同館で展覧できたことも特筆しておきたい。



図2

今年度は、巡回展として、平塚市美術館と足利市立美術館で柳原義達展を共催、ブロンズ彫刻に加え、石膏原型、素描を含む約90点を出品した。両館もまた、立体表現の紹介に力を入れている美術館であり、2019年度にも「空間に線を引く彫刻とデッサン展」を企画・開催している。

一般的に、美術館では、彫刻の展覧会開催は難しいとされる。複雑な造形で重量もある立体作品は、平面の絵画作品以上に、梱包や輸送、展示撤収作業に技術や時間、経費が必要であることが理由のひとつ。もうひとつには、絵画作品に比してなじみが薄く、集客が難しいことが指摘されている。近年は、美術館・博物館であっても採算性が厳しく問われるようになり、意義のある展覧会でも収益の見込めない展覧会は開催が困難になっている。このような状況において、扱いの難しい石膏原型や大型作品を多数展覧し、柳原の作品群を通して、彫刻の魅力をも広く発信できたことの意味は大きいといえるだろう。

3. Y²プロジェクト

2019年開催の「中谷ミチコ その小さな宇宙に立つ人」は、次代を担う美術家を紹介する「Y² project (ワイワイ プロジェクト)」の第1回目として実施した展覧会である⁶。

中谷ミチコ(1981-)は、美術大学卒業後、ドイツで学び、帰国後は三重を拠点に活動が続けている彫刻家。高校時代に出会った柳原作品の影響は大きく、大学在学中も、《犬の唄》シリーズを見たときの体験に囚われていた、と述べている⁷。

展覧会では、中谷の近作と展覧会に向けて制作された最新作、そして作家自身が選んだ柳原作品が記念館に展示された。時代を超えた競演を通して、柳原の芸術世界がいかなるものであったのか、それがどのように現代に生きる作家に影響を与えているのかに迫る展覧会となった(図3)。

展覧会后、柳原操基金、公益財団法人三重県立美術館協力会により、中谷の同展出品作《あの山にカラスがいる》(2016年)が当館に寄贈された。

むすびにかえて

これまで述べてきた活動とは規模も性格も異なるが、当館の美術情報室では、「柳原義達文庫」を設け、柳原旧蔵図書の一部を紹介している。



図3

彫刻作品や素描を鑑賞した後、作家が手元においた書籍と出会い、作家の思考の一端に触れる機会になればと願っている。

引き続き、託された作品、資料を有効に活用し、デジタルアーカイブ化も視野に入れ、より多くの人々が閲覧、利用可能な環境を整えることを目指していく。柳原義達の芸術に対する理解がより深まるように、彫刻全般への興味がいよいよ広がるように、当館がなすべきことを考え続ける必要があるだろう⁸。2023年には、柳原義達記念館開館20年、翌年には柳原義達の没後20年を迎える。託された作品や資料を、我々に出来得る最良のかたちで未来に繋ぎたい。

図1 記念館ロビーにて展示中の《道標・鴉》1970年 撮影：松原豊
(2020年「柳原義達の芸術 III」展示風景より)

図2 石膏原型展示風景(記念館A室)

図3 Y²プロジェクト「中谷ミチコ その小さな宇宙に立つ人」展示風景(記念館B室)

1. 大きい方の展示室A室は318㎡、天井も高いところでは7.8mを超える。当初からブロンズ彫刻の展示を前提に設計されたこの部屋には、自然光がとり入れられ、美術館内の展示室とは思えないほどに明るく開放的である。もう一方の展示室B室は162㎡、天井高4.5m。窓もなく、落ち着いた展示スペースとなっている。ロビーや休憩スペースもガラス張りで、季節や天候によって、彫刻がさまざまな表情を見せる。なお、記念館の柳原作品については、遺族の了承を得て撮影可能としている。
2. 毛利伊知郎「柳原義達記念館の開館」(美術館ニュースHILL WIND 2 2003年12月)
<https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/54149037225.htm>
3. FRP (Fiberglass Reinforced Plastics ガラス繊維などで補強された合成樹脂)を用いることもある。
4. 柳原義達「私と彫刻」(柳原義達「孤独なる彫刻」1985年)
5. 修復事業については、当館ホームページの年報(2014年～2017年)の収集資料の修復で報告を行っている。
<https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/53448036524.htm>
6. 原舞子「小さな宇宙を創造する人」(リーフレットテキスト 2019年)
<https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/common/content/000851566.pdf>
7. 会期中9月29日に実施されたアーティストトークより。
<https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/common/content/000859375.pdf>
8. 高曾由子「柳原義達と操のアトリエ」(HILL WIND 46 2020年3月)、太田聡子「柳原義達と陶芸①～④」(HILL WIND 43～46 2018年10月、2019年3月、2019年9月、2020年3月)などのように、寄贈資料の調査の成果の一端が常設の展示や美術館ニュースにも反映されている。
<https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/54149037225.htm>

来館しやすいミュージアムへー「三重県立美術館ソーシャル・ガイド」の開発過程

鈴村 麻里子

三重県立美術館では、2020年度から「美術館のアクセシビリティ向上推進事業」(以下、アクセシビリティ事業)を実施している。本事業は美術館のアクセシビリティ(=利用しやすさ)を向上させるために当館が中核館となり、文化庁の「地域と共働した博物館創造活動支援事業」の採択を受けて取り組んでいる事業。美術館を利用しづらい多様な人々に働きかけ、彼らと一緒に課題の解決方法を模索しながら「誰もが利用しやすい環境」を整えることを目指している。本稿では2020年度に本事業で作成した来館支援教材「三重県立美術館ソーシャル・ガイド」(全21ページ)の開発プロセスを紹介する¹⁾。

コミュニケーションを苦手とし、強いこだわりを持つ自閉症スペクトラム障がいのある人にとって、初めての場所に足を運び、その場に応じた行動をとることは、しばしば大きな困難を伴う。そのような自閉スペクトラム症の人たちのソーシャルスキル(他人と交流し、ともに活動するための能力)のトレーニングのために、1990年、当時アメリカの教師であったキャロル・グレイは、コミュニケーションの習慣や暗黙の了解を分かりやすく文章や図で説明する「ソーシャルストーリー™」²⁾という教育法を開発した。それをゆるやかに派生させた「ソーシャル・ナラティブ」や「ソーシャル・ガイド」と呼ばれるコンテンツは、現在、海外のミュージアムのウェブサイトでも公開され、自閉スペクトラム症のある人に限らず、さまざまな人の来館のハードルを下げる役割を果たしている。

2015年度に当館が知的障がいのある児童生徒が通う特別支援学校との連携事業を行った際、担当教員が下見の時に展示室からスタッフの顔に至るまで、くまなく写真を撮影し事前学習の資料を作りこむことに驚かされた。それでも来館できなかつたり、来館しても展示室に入れなかつたりすることもある発達障がいのある生徒は、連携事業を経て、筆者自身が美術館の対応に最も改善の余地があると感じた対象であった。そのような経緯から、2018年度に筆者が参加したアメリカでの学芸員等在外派遣研修においては、調査のメインテーマを「自閉スペクトラム症のある人向けのアクセス・プログラム」に設定した。

自閉スペクトラム症の子どもの人数が近年増加傾向にあると考えられているアメリカでは、ミュージアムでも当事者対象の教育プログラムや教材の開発が進められている。ミュージアムには、貸出ツールがあったり、静かな時間を過ごせる部屋があったりするだけでなく、発達障がいのある人向けのワークショップを定期的の実施していたり、開館前の混雑しない時間帯を当事者やその家族に特別に開放していたりする。さらに、オンラインリソースとしてソーシャル・ナラティブを公開しているミュージアムも多く、多様な来館者の多様な来館形態が考慮され尊重されていることが窺えた³⁾。

在外研修後、2020年度にはアクセシビリティ事業を立ち上げ、三重県立美術館のソーシャル・ナラティブの作成を試みることにした。まず、アクセシビリティ事業の実行委員会を構成する三重県子ども・福祉部の障がい福祉課より、三重県内の当事者やその支援者から構成される組織として、県全域の会員が活動する「三重県自閉症協会」(以下、自閉症協会または協会)の紹介を受けた。「三重県自閉症協会規約」によれば、同会の活動の目的は、「三重県の自閉症スペクトラム障害の人たちに対する福祉の増進と幸福のため、治療・教育・福祉・労働の対策の充実を図るような運動を展開する事」⁴⁾。2020年10月上旬に協会に連絡を取って協力を依頼したところ、とんとん拍子に話が進み、10月20日には役員の方3名の来館が実現した。

当日は、自閉症スペクトラム障がいのある当事者の特性や、家族等支援者が日常的に行っているトレーニングやサポートについて、担当の美術館職員3名(村上敬、大崎千野、筆者)が話を伺った。打合せでは、当事者本人はもちろん、その周りの人々も美術館を「利用しづらい層」になり得るのだ、ということを改めて実感した。海外のミュージアムが作成しているソーシャル・ナラティブの話をしたところ、協会役員が作成している教材と共通点が多いことも分かったため、まずは美術館がたたき台を作り、協会から助言を得て内容をブラッシュアップさせていくことにした。

海外のミュージアムの事例や、ソーシャルストーリー™の文例集を参照しながら、11月に美術館が文案を作成。また、本番の撮影に先立って、どのような写真が必要か、そのために館内のどこで写真を撮るか検討するロケーションハンティングも実施した。美術館で活動するボランティアや監視受付スタッフ、警備スタッフ、美術館職員にも、撮影への協力を依頼する際、



観覧券売り場にもある手帳の一覧の写真がここにもあると便利です。スタッフの方が聞いて下されば、このページも要らないと思います。

わたしの番が来たら、わたしはスタッフにチケットを渡します。スタッフは、切り取り線にそって、チケットをちぎってくれます。スタッフは、はしをちぎった後のチケットをわたしに返してくれるので、わたしはそれを受け取ります。受け取ったチケットは、他の展示室の入口でも見せるので、大切にしておきます。

※手帳を持っている人は、ここで手帳か引換証を見せます。「生徒手帳や学生証を見せてください」とスタッフに言われたら、生徒手帳や学生証を見せます。

美術館コメント:障害者手帳を最初に入る展示室の入口で提示すると、日付入りの引換証が渡されます。2番目・3番目に入る展示室の入口では、手帳ではなく引換証を提示してもらいます。

図1

ソーシャル・ガイド



展示室入口

展示室の入口で、チケットを渡します。



手帳の例

手帳を持っている人は、ここで手帳を見せます。

図2

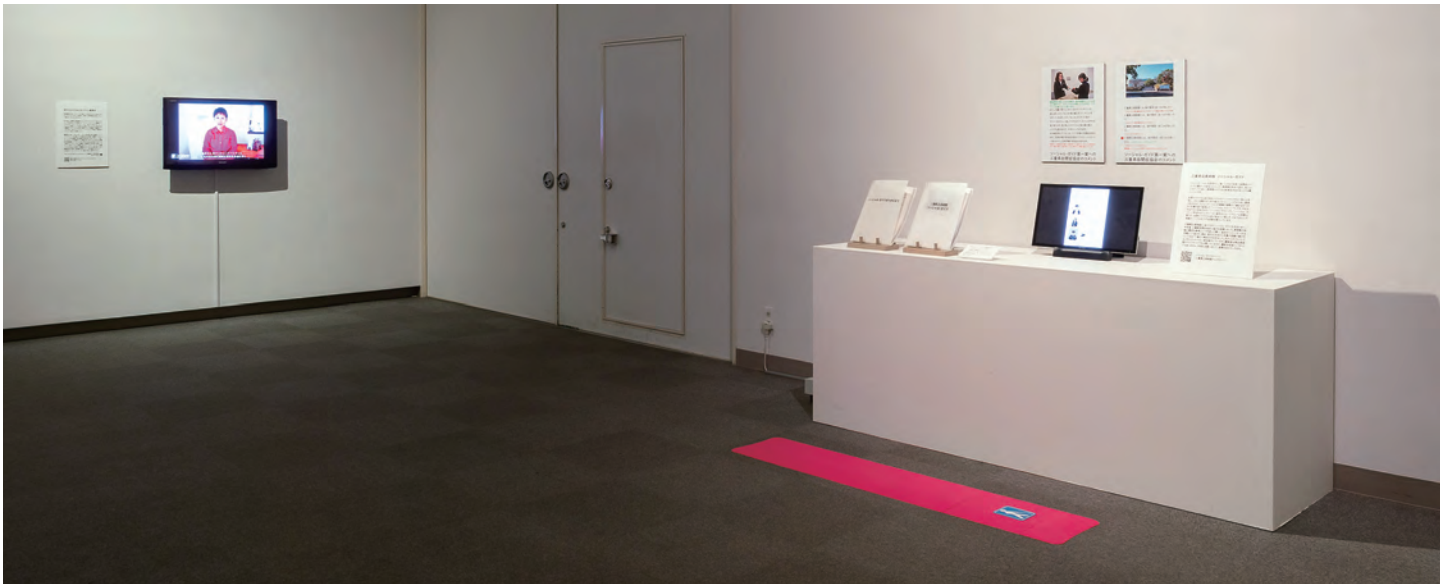


図3

誰のために何を作るか、そのためにどのような撮影を行うか説明した。

11月下旬、1回目の外観・内観撮影を実施。当日は写真家の松原豊氏と一緒に担当者3名が撮影箇所を巡り、撮影直後に画像データを1点ずつタブレットで確認する作業を繰り返し行った。「わたし」がチケット売場のスタッフからチケットを購入する、「わたし」が展示室入口のスタッフにチケットを見せる、「わたし」の質問に答えてくれる人としてインフォメーションのボランティアスタッフを紹介する等、スタッフがそれぞれの役割を実際の場所で演じながら撮影を行った。

12月上旬、写真を貼付した第一案を協会に提出。それを協会が12月に行われた理事会で検討し、意見を取りまとめて美術館に戻した(図1)。ここでは紹介できるページに限られるが、この初校には理事の方々からの真摯で温かいアドバイスがびっしりと書きこまれていた。

助言に基づいて一人称の「わたしは」を削除し、余分な説明をそぎ落として簡潔な文体に変更。フォントは丸ゴシックを採用し、総ルビ・分かち書き表示とした。初校でいただいた印象的な指摘が「現場で係の人が説明してくれるならこの記述は要らない」というもの。たしかに、スタッフがその先を説明するなら、ガイドで詳述する必要はない。説明を省略することは、裏を返せば、スタッフがいつでも質問に答えられる必要があるということで、ミュージアムにおける人の役割や人材育成の重要性に改めて気づかされた。

今回は複数の理事が校正に協力してくださったが、協会内部で多様な意見をまとめる作業は相当骨の折れるものだったのではと推察している。結果的にできあがったガイドは、ソーシャル・ナラティブのいわゆる「典型」にはならなかったかもしれない。作成時には、ガイドが先例として今後参照される可能性もあるため、普遍性を志向した方が良いのではないかという議論もあった。しかし検討の末、やはり今回は地域の当事者を一番よく知る方々の協力を得て、皆で一緒に作るプロセスを重視し、「三重の」「わたしたちの」ソーシャル・ナラティブ作りを目指すこととした。可能な限り当事者本人の声を聞くことがアクセシビリティ事業の趣旨ではあるが、このガイドの校正に関しては、当事者本人というより、当事者を熟知した支援者、家族の意見が反映されている。

協会から初校を受け取り、相談しながら一つずつ課題をクリアした後、当初案から項目やページ数、文章量を削減した第二案を作成。大幅な変更に伴って新たに必要となったカットも、2021年1月末に再度撮影した。第二案をベースにした教材を3月にウェブサイトで公開(図2)。名称については、多くの人になじみがあると思われるカタカナ語「ガイド」を使用し「三重

県立美術館ソーシャル・ガイド」とした。公開版は印刷も行き、協会や地域の特別支援学校に送付している。

2021年6月から8月に当館で開催した企画展「美術にアクセス!—多感覚鑑賞のすすめ」展では、このソーシャル・ガイドにも1コーナーを割り、解説とスライドショー、ガイド印刷版、協会からのアドバイスを展示した(図3)。展覧会会期中に団体として来館した特別支援学校の教員は、さっそく当館のソーシャル・ガイドをアレンジして事前学習に活用したという。また、いまだ多くの人には知られていない教材であるため、「このようなガイドを必要とする人がいるということをはじめて知った」という意見も少なからず頂戴した。このガイドの公開が、当事者の来館を支援するだけでなく、多くの人にとって、さまざまな特性を持つ他者への理解を深める契機となれば幸いである。

図1 ソーシャル・ガイド第一案のページ 緑の文字が協会からのアドバイス

図2 2021年3月に公開したソーシャル・ガイドのページ

図3 「美術にアクセス!」展の展示風景 右がソーシャル・ガイド展示コーナー 撮影:松原豊

以下のウェブページの最終閲覧日はすべて2021年8月3日

1. 「三重県立美術館ソーシャル・ガイド」三重県立美術館／美術館のアクセシビリティ向上推進事業実行委員会
<https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/common/content/000942095.pdf>
2. ソーシャルストーリー(ズ)とは、米ミシガン州の教師であったキャロル・グレイが開発した教育法のこと。教育技術そのものが登録商標化されたため、末尾にTMが付けられる。今回紹介する教育技術や教材は、厳密には「ソーシャルストーリー™」のガイドラインに準拠していないため、より一般的なものとして「ソーシャル・ナラティブ」や「ソーシャル・ガイド」と表記した。
3. 2018年度に筆者が参加した文部科学省／文化庁学芸員等在外派遣研修については、以下を参照。拙稿「メトロポリタン美術館における自閉スペクトラム症のある人々に向けた取組(海外博物館だより)」『博物館研究』2020年3月号(55巻3号/通号 621号)、22-24頁
4. 「三重県自閉症協会規約」三重県自閉症協会
<http://www.ztv.ne.jp/tbatuhk3/miejiehi/kiyaku.html>

あのころ、三重県美は…

開館1周年記念展から10周年記念展の頃 荒屋舗 透

職場から帰ると食事をして仮眠をとり、深夜に起きて勉強をする。これは三重県立美術館に事務局のあった鹿子木孟郎調査委員会のひとり、高階秀爾氏がかつて学芸員時代に実行した方法と聞き、私も試みた。なかなか難しいが森鷗外を調べていたとき、軍医と文学者の生活を同じ方法でわけていたことを知り、高階氏はそれを做ったのかと頷いた。職業として軍医も学芸員も忙しすぎるのだ。家で書物をひらく前、疲れをとっておく必要はある。

1983年(昭和58)6月から1995年(平成7)3月まで、私は三重県美に在職した。最初の仕事はHILL WIND編集や開館1周年記念展だった。学生時代は出身地の東京で過ごしたので、津に来た時はカルチャーショックが大きかった。さらにはじめて経験する自炊とアパート暮らし。家賃は2万6,000円の風呂もない部屋だ。さいわい風呂屋が目まで毎晩通った。冬の夜は辛かった。洗濯のやり方と自炊をしてくれたのは、学芸課長(自分では、まとめ役と言っていた)の中谷さんだ。はじめは自炊もままならず、毎晩、中谷さんと東さんが夕食をつきあってくれた。旨くて安い店をしてくれたのだ。「あらちゃん(私は皆にそう呼ばれていた)、人生、もうダメだと思ったときに勝負や」。中谷さんの口癖だ。近鉄を経てJRでなく阪神や阪急電車に乗り、大阪や京都に行く方法を教えてくれた。私鉄運賃の安さに驚いた。キャラクターもあるが学芸課長はこういう人でないと務まらない。後年、自分が同じ立場になったとき理解した。

アーティストとの出会い、これが学芸員の財産のひとつである。画家の原精一氏と彫刻家の片山義郎氏のアトリエは忘れられない。昭和戦前期の芸術家の家を髣髴とさせていたからだ。ふたりは人間もそうしたスケールもっていた。彫刻家で詩人の飯田善國氏のはじめての回顧展を担当したとき、こんどは作品との格闘を経験した。荷台の天井が開くウィング車というトラックを知った。飯田さんは作品の着色も手伝わせてくれた。スラスラ仕事をこなしたようだが、決してそうではない。失敗の連続だ。作品の集荷で、私はなんと台座を借用することを忘れ、あとから日通に空輸してもらう騒動もあった。飯田さんの展覧会のお祝いの席が、私の不手際でしらけたとき、飯田さんの友人の池田満寿夫氏が大きな声で歌いだし、座を盛り上げてくれた。

三重県美は私のはじめての職場なので、陰里鐵郎館長は最初の上司であった。三重県美の設立に貢献した、鎌近(鎌倉近代美術館の略、神奈川県立近代美術館をそう呼んだ)の館長であった土方定一を顕彰する、開館10周年記念展は、上司の不満足という結果に終わった。しかしこの展覧会で酒井忠康氏など、土方山脈の豪傑たちと交流した。多くの美術関係者との出会い、鹿子木孟郎調査委員会もそうした場となり、三重県美のボランティア檜の会、友の会の方々との交流は、私のカルチャーショックを徐々に和らげてくれた。津で家族をもつことも出来た。

様々な失敗をくりかえすと、職場の風土がいかに人間形成に影響するのにか痛切に感じる。三重県美に勤務した12年ほどの間、私は多くの展覧会を経験した。満足に仕上げられたものはひとつもないが、なんとか学芸課長の中谷さんや普及課長の森本さんはじめ、同僚の学芸員の助けで開催にこぎつけた。助けには様々な様態があるが、毛利さんはこっそり助けるタイプの学芸員だ。図録の作家・作品解説を、私が館長から突然言いわたされたとき、瞬間に書きあげ入稿してくれる毛利さんの速業をみた。1986年担当の黒田清輝展の原稿を私は原稿用紙で渡した。ワープロ原稿は87年の片山義郎展から。いまはこのHILL WINDの原稿をPCワードでなおしている。東さんは三重県美の学芸室で私の前に席があったが、自分は詩をまだ原稿用紙に書いている、と言っていた。私は編集担当時代、HILL WINDの原稿の多くを原稿用紙に書いた。いまは昔の話である。

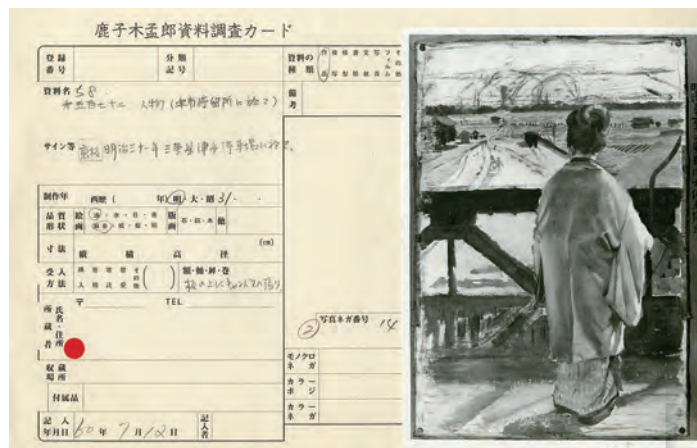


図1
「鹿子木孟郎資料調査カード」。「津の停車場・春」(1898年)調書。現在、修復され木枠にキャンバス貼だが、当初、裏板に画紙で留められていた。



図2
「つながれた形の間—飯田善國展」(1988年)屋外看板



図3
「開館10周年記念 アーティストとクリティック 批評家・土方定一と戦後美術」展(1992年)の三重県美講堂における同展・公開座談会、黒板前右から飯田善國氏、酒井忠康氏、富山秀男氏、陰里鐵郎館長。

荒屋舗 透(あらやしき・とおる)

1956年東京都生まれ。慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程修了後、1983年から三重県立美術館に勤務。山梨県立美術館学芸第一課長、ポーラ美術館準備室チーフ・キュレーター、ポーラ美術館学芸部長、館長を経て、現在は中部大学民族資料博物館長・人文学部教授。三重県立美術館時代に担当した展覧会は「生涯120年記念 黒田清輝展」(1986年)、「没後50年 鹿子木孟郎展」(1990年)など。主な著書に『グレー＝シュル＝ロワンに架かる橋—黒田清輝・浅井忠とフランス芸術家村』(2005年)がある。

「うどん」の時代—杉浦非水の大阪

高曾 由子

この冬、三重県立美術館ではモダンデザインの草分け的存在である杉浦非水(1876–1965)の展覧会を開催する。デザインの意義が今日ほど理解されていなかった時代、非水は三越呉服店図案部初代主任、多摩帝国美術学校の校長として、大正昭和のデザイン界を牽引した。

近代的な都市を描いたポスターや三越呉服店での華々しい仕事で知られる非水であるが、32歳にして三越呉服店に職を得るまでは、上京を目指しつつ大阪や島根を転々とする時期を過ごした。当館では、2014年に非水の親友であった洋画家中澤弘光の展覧会を開催し、この前後には中澤のアトリエに遺されていた作品資料を調査、受贈したが、この中には若年期の非水にまつわる資料が複数遺されている。ここでは、展覧会に先んじて、中澤旧蔵資料を手掛かりに非水の大阪時代についてご紹介したい。

杉浦非水は愛媛県松山市生まれ。はじめ日本画家を志して上京し、東京美術学校に学ぶが、1901年、洋画家黒田清輝がアール・ヌーヴォー隆盛のフランスから持ち帰った雑誌、資料を見せてもらったことをきっかけにデザイナーを志した。もともと黒田を慕っていた非水は、同年には黒田邸の書生となる好機を得てデザインの勉強に励むこととなる。この時ともに黒田邸に住んでいたのが黒田門下で油彩画を学んでいた中澤弘光で、2歳違い、ともに詩歌やデザインに関心が深かった二人はたちまち意気投合した。1902年に非水が黒田の斡旋で大阪の三和印刷店図案部に職を得てからも、手紙や往来によって交友は続けられた。

非水の大阪での仕事は、雑誌表紙や広告などのデザインで、初めての仕事は非水の制作意欲を大いに刺激した。非水は「私のやりつゝある欧風図案を実際に応用する機会に初めて接したので、自分は夢中になってアール・ヌーボーを盛んに振りまこうとした¹⁾」という。

中澤旧蔵資料よりこのたび発見された《大阪商船株式会社絵葉書》は、この時代に手がけられたもの。同社は非水が「宣信用絵葉書及メニューの図案²⁾」を兼業して描いた会社である。浮き輪を手に松明を掲げる有翼の少年を描いた本作は二色刷りの簡素な印刷ながら、機知のある構図や平面的な意匠からは、すでに非水が印刷デザインに優れた手腕を発揮していたことがわかる。この時期、非水は本名の朝武名で活動しており、名前のイニシャルをサインとして用いた。本作で浮き輪の下に見られるTとSを重ねたモノグラムは、この時期の非水のデザインにしばしば添えられるものである。

また、詳細は不明ながら、中澤旧蔵資料にはほかにも同様のイニシャルをもつ絵葉書が数点存在する(図2–4)。1903年に画家宇和川通諭が大阪から中澤に自らの近況を書き送った絵葉書もその一つで、鯉に波文を重ねた美しい図が添えられる。宇和川は黒田の紹介で北濱銀行の壁画制作

のため来阪し、非水と同宿した時期もあり、この挿絵も非水の手になる可能性があるだろう。

これらの資料に見られる横向きの人物像や太い輪郭線には、非水が黒田邸で模写に励んだという画家ミュシャの作品などの影響を見てとれ、非水の回顧通り、フランスや東京での流行から間を置かず大阪にアール・ヌーヴォー調のデザインがもたらされたことがわかる。一方、これらの資料ではアール・ヌーヴォーに特徴的な甘美で退廃的な趣は抑えられているのも特徴であろう。非水がこの時期専ら広告の仕事を行っていたことも関係するのか、明快で整理された印象である³⁾。

当時旧式な広告が支配的であった大阪で非水の広告は好評を博し、その平面的で太い輪郭線を多用するデザインは「うどん」という呼び名で親しまれたという。なんとユーモラスな呼び名であるが、当時の好評ぶりを伝えると同時に、簡潔で明るい非水デザインの個性が捉えられているようで興味深い。

若くして精力的な活動を行っていた非水だが、来阪当初は縁ない土地での就職に恋人との破局が重なり、私生活は重く沈んでいたらしい。この時期たびたび相談相手となったのは中澤で、今日残される中澤宛の手紙には「未来はいかに僕の歩みの道の開け居候にや、只霽深き道にひとり思ひ⁴⁾」と将来への不安が吐露される。模索の中にあつた非水だが、後にはこの時期の装丁が黒田からも評価を受けるなど⁵⁾、大阪時代の業績は後の活躍を支えることとなった。

この冬の展示では、非水の代表作にスケッチや資料を加え、その生涯の活動をたどる予定である。デザインの可能性を切り開いた非水の模索と躍進の軌跡を、是非ご覧いただきたい。

図1 《大阪商船株式会社絵葉書》1902年頃 印刷・紙 三重県立美術館

図2, 3 《絵葉書デザイン画》水彩・紙 三重県立美術館

図4 《宇和川通諭宛中澤弘光宛絵葉書》1903年6月1日 個人蔵

1. 杉浦非水「日本に於ける欧風図案の回顧」『アトリエ』6巻9号、1927年。
2. 大阪時代については以下を参照。「自伝六十年」『広告界』、1936年に連載、「<写生>のイメージーション—杉浦非水の眼と手」宇都宮美術館、2009年に転載。
3. 前村文博氏は、非水がこの時期手がけた第5回内国博覧会の建築装飾をとりあげ、「実直で質素な造形が試みられていた」ことを指摘している。註2。
4. 「中澤弘光遺品資料調査報告書」2016年、268-270頁、朝武名弘光宛書簡、内容から1903年12月。
5. 黒田清輝「杉浦君の表紙画」『三越』2(5)、1912年。



図1



図2



図3

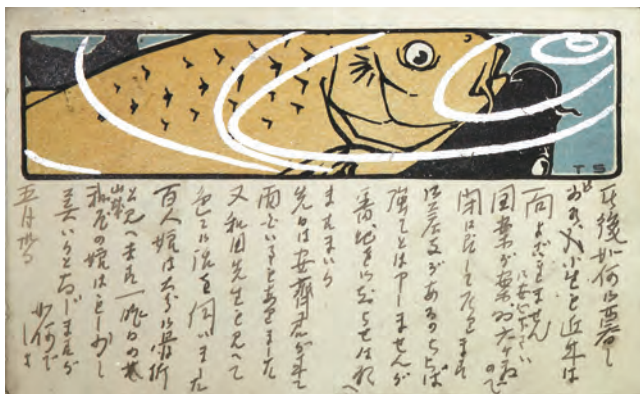


図4



表紙解説

「杉浦非水 時代をひらくデザイン」より

高曾 由子

人が所狭しと並ぶホーム。人々が待ち望んでいるのは、いままさにホームに入ろうとする車両である。構内には電燈が明るく灯り、手前には毛皮のあるコートを着た婦人、ハットの男性が談笑する。華やかでモダンな都市の一場面である。

本作は東京地下鉄道株式会社が、東京の上野から浅草間を走る、アジアで初めての地下鉄開通を宣伝するために制作したポスター。当時流行のアール・デコ様式を採り入れつつ、奥行きを強調した臨場感ある構図は、「科学の粋を集めた地下鉄」の近代性をも巧みに表現している。お洒落に着込んだ乗客の装いは、12月30日の開通日を予告するものだろう。

作者の杉浦非水はデザインの目的は生活と社会をより良くすることにありと考へ、とりわけ街の景観を彩るポスターに力を入れた。非水の代表作であり、グラフィックデザイン史に残る名作として知られる一点。

《東洋唯一の地下鉄道 上野浅草間開通》1927年、リトグラフ、オフセット・紙、愛媛県美術館蔵

利用のご案内

■開館時間 9:30-17:00 (入館は16:30まで)

■休館日

月曜日(祝休日にあたる場合は開館、翌日閉館)
[2022年1月11日(火)、2022年3月22日(火)]、年末年始[2021年12月29日(水)-2022年1月3日(月)]

■観覧料

【常設展示の場合】

<美術館のコレクション+特集展示/柳原義達の芸術>
一般: 310 (200) 円 / 学生: 210 (160) 円 / 高校生以下無料
()内は20名以上の団体割引料金

【企画展示の場合】

その都度定めます。
※学校の教育活動として県内の小・中・高・特別支援学校等が観覧する場合、引率者も含めて無料となります。
※障害者手帳等をお持ちの方が観覧する場合、付き添いの方1名を含めて無料となります。
※家庭の日(毎月第3日曜日)の観覧料は各展覧会(企画展/常設展)の団体割引料金となります。
※関西文化の日[2021年11月13日(土)、14日(日)]は常設展の観覧が無料になります。

■メールマガジン

三重県立美術館の情報をみなさんのパソコン、携帯電話へお届けします。登録無料。詳しくは、美術館ホームページをご覧ください。

■美術館公式twitter

三重県立美術館の最新情報をリアルタイムで配信しています。
Follow us on Twitter @mie_kenbi



■交通

津駅(近鉄・JR)西口より徒歩約10分または、津駅西口1番のりばより三重交通バス「西団地循環」、「津西ハイタウン行き(むつみ・つつじ経由)」、「夢が丘団地行き(総合文化センター前経由)」、「総合文化センター行き」のいずれかに乗車約2分、「美術館前」下車徒歩約1分
※できる限り公共交通機関をご利用ください

三重県立美術館 Mie Prefectural Art Museum

〒514-0007 津市大谷町11
Tel: 059-227-2100 / Fax: 059-223-0570
<https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/>

HILL
WIND
79

三重県立美術館ニュース「HILL WIND 49」

発行日: 2021年10月13日(禁・無断転載)
企画・編集・発行: 三重県立美術館
印刷: 上野印刷株式会社
デザイン: 豊永政史

■「三重県立美術館友の会」へのお誘い

友の会は三重県立美術館を支える団体として活動しています。研修旅行、美術講演会、美術散歩等、会員同士の楽しい交流や美術の教養を深める催しに参加できます。
○年会費: 一般会員 3,000円/ペア会員 5,000円/グループ会員(4名) 8,000円
○特典: 会員鑑賞券配付、観覧料半額割引、レストラン・ミュージアムショップご利用割引等。
詳細は三重県立美術館友の会事務局(TEL. 059-227-2232)までお問い合わせください。

■「公益財団法人 三重県立美術館協働会賛助会員」へのお誘い

美術館の調査・研究事業補助、カタログなど美術資料の作成頒布等、美術館活動活性化のための事業をおこなっています。主旨にご賛同いただき、賛助会員へのご加入をお願いします。
○会費: 年間一口 法人 50,000円 / 個人 25,000円 / 準会員 10,000円
○特典: 展覧会ならびにレセプションへの招待、各展覧会のカタログ謹呈(準会員は半額)等。
詳細は三重県立美術館協働会事務局(TEL. 059-227-2232)までお問い合わせください。